

# 教育研究業績書

2018年05月14日

所属：健康・スポーツ学科

資格：講師

氏名：保井 俊英

研究分野	研究内容のキーワード
障がい者スポーツ、バイオメカニクス、運動生理学、健康科学	障がい者スポーツ、アダプテッドスポーツ、障がい者スポーツ指導員資格、ジャンプ、筋力、筋パワー、体力、トレーニング、生活習慣病、糖尿病、腎障害、自発的運動
学位	最終学歴
体育学修士、体育学士	日本体育大学大学院 体育学研究科 体育学専攻 修士課程 修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 教育方法の実践例</b>		
1. 基本的バレーボール技能の習得の工夫	2007年04月～現在	バレーボール授業において、積極的にグループ学習を取り入れ、基本、応用、ゲームへと段階的指導を行っている。特に、個人の基本技能と考える「対人レシーブ」「スパイク」「フローターサーブ」については、ハードルを設け、それに達するまで、徹底的に学習させるように取り組んでいる。
2. 障害者スポーツの指導法等について	2002年04月～現在	障害者スポーツにおいては、まず障害者を知ることから始めている。それは、テレビにて放映された障害者スポーツ関連番組を多用し、見てイメージをつくらせている。また、積極的に調べさせ、そして発表させたり、指導させることによりその難しさや障害者への理解をさせている。 短大で行っている「障害者スポーツ指導法」では、学生が担当して模擬的な授業を行わせているが、すべて教材だという意識を植え付けられるように配慮している。
<b>2 作成した教科書、教材</b>		
1. 授業における教材	2003年04月～現在	担当している授業（大学健康・スポーツ科学科：バレーボール、健康・スポーツ科学演習、卒業論文など、短大健康・スポーツ学科：バレーボール、障害者スポーツ論、障害者スポーツ指導法など、食生活学科：運動生理学）について、資料および授業で使用したプレゼンテーション資料を電子化し、大学内のgetフォルダーに保存し、学生が自由に取り出せるようにしている。
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
1. 平成16年度大学連携ひょうご講座「スポーツのみかた・たのしみかた」講師	2004年11月10日	第8回「障害者の視点からみたスポーツの世界」を担当。
<b>4 その他</b>		
1. バドミントン部部长	2017年04月01日～	バドミントン部部长として、部員の指導。
2. バドミントン部副部长	2016年08月01日～2017年03月31日	バドミントン部の副部长として部員の指導
3. バレーボール部監督兼副部长	2007年04月01日～2013年03月31日	学友会バレーボール部にて、監督および副部长として部員の指導。 その間の成績としては、平成19年度関西大学バレーボール連盟春季リーグ戦優勝、平成23年度関西大学バレーボール男女選手権大会優勝、平成24年度全国私立短期大学体育大会バレーボールにて優勝などであった。
4. バドミントン部監督および部長・副部长	2003年04月01日～2007年03月31日	バドミントン部監督および副部长・部長として部員を指導。 主な成績としては、第44回および第45回西日本学生バドミントン選手権大会ベスト16、2003年関西学生バドミントン秋季リーグ戦2部、2004年関西学生バドミントン秋季リーグ戦2部、2005年関西学生バドミントン秋季リーグ戦2部いずれも2位であった。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 資格、免許</b>		
1. 国際バレーボール連盟 コーチLevel 1	1992年08月28日～現在	
<b>2 特許等</b>		
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
1. 第1回（財）日本障害者スポーツ協会公認障害者スポーツ指導者認定校研修会	2006年10月23日	講演会にて、講師として、「武庫川女子大学健康・スポーツ科学科 卒業後の動向・追跡調査について」発表講演し、認定校の方向性を示した。
<b>4 その他</b>		
1. 平成25年度兵庫県立総合体育館キッズ・ジュニア塾講師	2013年10月	兵庫県立総合体育館、健康・スポーツ科学科の連携事業として、小学生～中学生対象のバレーボール教室を3回実施（予定）

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>4 その他</b>		
2. 平成24年度兵庫県立総合体育館キッズ・ジュニアスポーツ塾講師	2012年10月	兵庫県立総合体育館、健康・スポーツ科学科の連携事業として、小学生および中学生対象のバレーボール教室を3回実施。
3. 関西大学バレーボール連盟 常任理事および総務委員長	2012年04月01日2016年03月31日	連盟の常任理事、総務委員会委員長
4. 西日本大学バレーボール連盟 総務委員長	2012年04月01日2016年03月31日	連盟の総務委員会委員長
5. 全日本大学バレーボール連盟 総務委員	2012年04月01日2016年03月31日	連盟の総務委員会委員
6. 平成23年度兵庫県立総合体育館キッズ・ジュニアスポーツ塾講師	2011年10月	兵庫県立総合体育館、健康・スポーツ科学科の連携事業として、小学生～中学生対象のバレーボール教室を3回実施。
7. 平成22年度兵庫県立総合体育館キッズ・ジュニアスポーツ塾	2010年10月	兵庫県立総合体育館、健康・スポーツ科学科の連携事業として、小学生～中学生対象のバレーボール教室を3回実施。
8. 全日本大学バレーボール連盟 登録・規約委員	2010年04月01日～2012年03月31日	連盟の登録・規約委員
9. 平成21年度兵庫県立総合体育館キッズ・ジュニアスポーツ塾講師	2010年02月	兵庫県立総合体育館、健康・スポーツ科学科の連携事業として、小学生～中学生対象のバレーボール教室を2回実施。
10. 平成21年度西宮市スポーツ指導者養成講習会講師	2009年07月21日・2009年09月01日	「バレーボールの指導に役立つ技能と知識の習得」講師として、「バレーボールの子どもと大人への指導の相違点」「今後のバレーボールを指導するにあたっての総括」を担当し、好評を得た。
11. 関西大学バレーボール連盟 総務副委員長	2009年04月01日～2012年03月31日	連盟の総務委員会 副委員長
12. 平成20年度中級障害者スポーツ指導員養成講習会講義「安全管理Ⅱ」講師	2008年11月23日	障害者スポーツ指導員講習会にて、「安全管理Ⅱ」を担当し、リスクマネージメントの重要性を講義した。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
<b>2 学位論文</b>				
1. 跳躍高に及ぼす要素分析(修士)	単	1983年01月	日本体育大学大学院体育学研究科体育学専攻	ジャンプの主動筋はPre-stretchingによる跳躍高の増加、およびこの原理を用いたプリオメトリックトレーニングによる効果を検討した。スクワットジャンプに荷重を加える反動動作ジャンプと、台高40cmのドロップジャンプを行わせた。反動動作ジャンプでは、沈み込み時の膝屈曲角度を大きくするほど増加する。また、ドロップジャンプでは、跳躍高を増加させたが、種々の体力エネルギーを示す測定による変化はなく、ジャンプ運動の効率の改善、動作適応現象の向上と考えられる。
<b>3 学術論文</b>				
1. 任意運動による2型糖尿病発生抑制と運動器への影響 ―糖尿病モデル動物による研究―	共	2015年12月31日	畿央大学紀要, 第12巻, 第3号, PP. 29-31.	峯松, 花岡, 高田, 奥田, 鷺尾, 竹下, 保井, 石見, 今北, 坂田 「質の高い健康寿命をめざす健康科学-健康でいきいきとした暮らしのために-」との研究領域において、運動に焦点を当て、糖尿病との関連を明らかにすることを目的に実施した。5週齢OLETFラット(OLETF-EXE 5匹, OLETF-SED5匹)とLETO5匹を使用し、17か月間飼育した。実験期間中または終了後に、OGTT, 運動パフォーマンス, 骨特性などを測定、解析した。加えて、血液検査を実施した。①2型糖尿病ラットにおいて17か月にわたる任意運動は、糖尿病の発症を抑制した。②任意運動により運動パフォーマンスの劣化が軽減された。③任意運動は糖尿病腎症の発症を完全ではないものの抑制したと考えられる。④任意運動により完全ではないものの骨特性の劣化は抑制された。
2. 体育系女子大学におけるキャンプ実習の効果に影響を与える普遍要素の探求(査読付)	共	2012年12月	2012年12月健康運動科学 第3巻(1) pp. 19-32	中村哲士, 小柳好生, 保井俊英 体育系大学における指導者養成としての授業「キャンプ実習」が如何にあるべきかを、一形態の実習10年分のデータを用い実習前後の意識変化と自己達成度の評価から検討した。自己評価による達成度構成要因としては、「積極性と適応」「民主と公平」「触発と参加意欲」「健康状態」が抽出され、自然・野外活動・共同生活の3分野に対して共通に強い説明力を有す因子は「積極性と適応」と「触発と参加意欲」であった。
3. 知的障害者における日中の心拍数による活動強度について ―成人	共	2012年03月	武庫川女子大学紀要 自然科学編 第59巻 PP	保井俊英, 三上真二 知的障害者における運動不足を把握するために、日

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
男子の場合ー			.37-41	中の心拍数を計測し、活動強度を推定した。被験者Aは、平均81.9±12.9拍/分、最高129拍/分であり、健康のために必要である最大酸素摂取量60%強度の運動は皆無であった。被験者Bは、平均96.4±8.1拍/分、最高120拍/分であり、最大酸素摂取量60%強度の運動は皆無であった。両者とも十分な運動をしているとは言えなかった。
4. 2010年度入学生における「障害者スポーツ」の認識について ー大学健康・スポーツ科学科においてー	共	2011年03月	武庫川女子大学紀要 人文・社会科学編 第5 8巻 PP. 45-51	保井俊英、三上真二 2010年度入学生より、障害者スポーツ指導員認定制度のカリキュラム変更を行った。障害者スポーツの認識調査を行い、障害者スポーツ教育に結び付ける目的で研究に取り組んだ。①身近なところに障害者がいると回答した学生は38名(22.9%)、障害者と交流するボランティアに参加した学生は31名(18.7%)であった。②障害者スポーツに関するテレビ番組を「見る」「たまに見る」が72名(43.4%)、新聞記事を「目に留まったら見る」が72名(43.3%)であった。③障害者スポーツについて「非常に興味がある」「興味ある」が73名(44.0%)で、知っている種目については、車椅子バスケットボール、バスケットボール、水泳の順であった。④資格は、初級スポーツ指導員希望している学生が56名(33.7%)、中級スポーツ指導員が41名(24.7%)であった。⑤今後、資格の情報提供のタイミングとその方法が重要となり、資格取得希望者数に影響を及ぼすと考えられる。
5. 女子学生バレーボール選手(関西学生1部リーグ所属)における体組成と全身持久力の特徴(査読付)	共	2010年12月	健康運動科学 第1巻 PP21-24	田中繁宏、五藤佳奈、保井俊英 女子バレーボール選手(インターハイ優勝)と同じく優勝のバスケットボール選手では身長、体重、体脂肪率(%)は選手間では有意差がなかった。一方、ギリシアの競技バレーボール選手163名の研究では、ナショナルチームクラスの選手でも比較的体脂肪率が高い。今回、関西1部リーグの学生バレーボール選手と体育系非運動部所属の学生で体組成を比較検討した。バレーボール選手は一般学生に比べ最大酸素摂取量が高く、体脂肪率が低く、よく鍛錬されていた。スポーツ特異性の体組成の報告は少なく、今後これらに関する民族特異的なホルモン分泌量を含め、より詳細な研究が必要と考えられた。
6. 「障害者スポーツ」に対する意識レベルについて(2) ー2年分の調査からー	共	2010年03月	武庫川女子大学紀要 人文・社会科学編 第 57巻 PP. 75-81	保井俊英、永田隆子、三上真二 前回調査と同様の方法で、2009年大学健康・スポーツ科学科入学生154名にアンケート調査を行った。中級スポーツ資格取得を希望する、障害者スポーツに興味あるが約半数いた。約1/3が、実際障害者と接しており、また諸情報を得ている。車椅子バスケットボール、バスケットボールの認知度が高い。
7. 女子中学生バレーボール選手の外傷・障害に関するアンケート調査(査読付)	共	2009年05月	関西臨床スポーツ医・ 科学研究会誌	田中繁宏、山本彩未、相澤徹、目連淳司、三井正也、中村哲士、保井俊英、北島見江、伊達萬里子 競技能力別に外傷・障害の発生に違いがあるのかを知る目的でユースクラス女子バレーボール選手と一般の女子中学生バレーボール選手でアンケート調査を実施した。ユースクラスと一般の両群間に外傷・障害の既往の差は認められなかった。受傷部位に関しては、足関節、手指、膝の順で外傷・障害が多かった。
8. 「障害者スポーツ」に対する意識レベルについて ー障害者スポーツ中級スポーツ指導員資格取得に結びつけるためにはー	共	2009年03月	武庫川女子大学紀要 人文・社会科学編 第 56巻 PP. 127-131	保井俊英、永田隆子、濱屋桃子、三上真二 新入生167名に対して、「障害者スポーツ指導者資格についてのアンケート」実施し、今後の指導に生かすことを目的に行った。①資格取得を希望する学生は、興味があると答えた。②身近なことに障害者がいるが46名、ボランティアに参加した学生は56名、障害者スポーツに関係するテレビ・新聞等をよく見るが20名であった。③知っている種目は、バスケットボールが77名、車椅子バスケットボールが75名、水泳が42名であった。
9. 健康・スポーツ科学科のキャンプ実習から得られる実行力と指導力	共	2009年03月	武庫川女子大学紀要 人文・社会科学編 第5 6巻 PP. 107-115	中村哲士、保井俊英 今回の研究は、実習の評価で最も重要な実践力養成に関わる「実行力・指導力の獲得」の部分について、4年間の研究成果を対等な位置関係で比較検討しなおすことを主眼に置き実施した。「火おこしとマキの組み方」「飯盒炊飯」「野外調理」「刃物の使用」については、実行力と同様に、指導力も獲得されている「登山」「スポーツ活動」「キャンプファイヤー」は、理解しやすく、実行力の獲得しやすいプログラムである。
10. 授業「キャンプ実習」に関する研究(4) ー4ヶ年の基礎研究と総合評価ー	共	2008年03月	武庫川女子大学紀要 人文・社会科学編 第55 巻 PP. 115-125	中村哲士、保井俊英、會田宏、小柳好生、中西匠、永田隆子、田中繁宏、西坂珠美、松岡紗也香、野老稔 4ヶ年の比較と総合評価をおこなった。目標は、各

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
11. 「障害者スポーツ指導者制度中級スポーツ指導員」資格取得者の意識と指導実績について	共	2008年03月	武庫川女子大学紀要 人文・社会科学編 第55巻 PP.107-113	実習に存在する最大公約数の解明である。1.実習への取り組み方に学年差が生じた。2.自覚せねばならぬ一様性の検討と時間確保が課題とされた。3.因子分析は、「相互指導と配慮」「公平と民主」「触発と参加意欲」「積極的な協力と工夫」「楽しさの共有」「自己管理と健康状態」の6要因を抽出した。4.天候による影響をコントロールする困難性が顕在化した。 保井俊英, 永田隆子, 三上真二, 藤原進一郎 中級スポーツ指導員の資格取得時の指導経験の実態と取得者の意識について検討した。取得目的は、必要性和興味が全体の2/3を示し、取得の意識は1年次44.8%、2年次前期までに72.4%が示している。指導実績は、「養護学校参加実習・介護等体験」「障害者(児)サポート」「障害者スポーツサポート」が多い。取得後の活動希望者がほとんどであるため、今後のサポートが必要である。
12. 授業「キャンプ実習」に関する研究(3) -3ヶ年の基礎研究比較と総合評価-	共	2007年03月	武庫川女子大学紀要 人文・社会科学編 第54巻 PP.39-49	中村哲士, 保井俊英, 會田宏, 小柳好生, 松本裕史, 田中繁宏, 四元美帆, 西坂珠美, 野老稔 3ヶ年の比較と総合評価をおこなった。目標は、各実習に存在する最大公約数の解明である。1.基礎の習得と能力の向上の2面性がうかがえた。2.自覚せねばならぬ一様性の検討が新課題とされた。3.時間確保も新課題とされた。4.因子分析は、「相互指導と配慮」「担当プログラムと満足感」「触発と参加意欲」「自己の健康状態と安定」「活動量の適切さ」「プログラム指導と不安」の6要因を抽出した。5.社会性に好影響を及ぼしていた。
13. 障害者スポーツ指導者制度中級スポーツ指導員資格取得者のための指導経験について	共	2007年03月	武庫川女子大学紀要 人文・社会科学編 第54巻 PP.21-28	保井俊英, 永田隆子, 三上真二, 藤原進一郎 障害者スポーツ中級スポーツ指導員資格取得に関わる指導経験について、有益かつ行ないやすいパターンを検討するために、2004、2005年度資格取得者計44名を対象として研究を進めた。(1)養護学校参加実習・介護等体験実習や障害者スポーツサポートを中心に指導経験を選ぶことが、行いやすく継続もしやすい。(2)スポーツ種目では、水泳が多い。(3)多くの仲間を得て、活動を共にすることによりモチベーションはあがる。
14. 障害者スポーツ指導者制度中級スポーツ指導員資格申請について -3年間の指導実績-	共	2006年03月	武庫川女子大学紀要 人文・社会科学編 第53巻 PP.51-58	保井俊英, 永田隆子, 藤原進一郎 障害者スポーツ中級スポーツ指導員資格取得のための、3年間における指導実績を調査した(2004年3月卒業、24名)。(1)3年間の指導実績は、平均21.2±9.57日間。(2)障害者スポーツサポート24名、養護学校参加実習・介護等体験実習20名、障害者サポート15名が中心。(3)障害者スポーツサポートは、主に障害者スポーツ施設・機関を活用した内容が多く、水泳関連の内容も多かった。(4)障害者スポーツボランティア情報の充実が課題。
15. 授業「キャンプ実習」に関する研究(2) -2ヶ年の基礎研究比較-	共	2006年03月	武庫川女子大学紀要 人文・社会科学編 第53巻 PP.33-42	中村哲士, 保井俊英, 會田宏, 小柳好生, 田中繁宏, 永戸久美, 四元美帆, 野老稔 2ヶ年の基礎的資料収集による比較検討を実施した。目標は、2ヶ年の最大公約数の解明である。結果から以下のことが言えた。1.事前教育の必要性。2.環境適応能力の一様性、実習直前の期待度の高さが観察された。3.各プログラムの運営・指導不足。4.因子分析の結果、実習成否の鍵が明らかとなった。5.昨年の「本実習のスタイルでは自然に対する理解や好意に関する面への効用は期待できない」とする一見解は、否定された。
16. 授業「キャンプ実習」に関する研究(1) -参加者の意識・行動・学習・達成レベルの基礎的検討-	共	2005年03月	武庫川女子大学紀要 人文・社会科学編 第52巻 PP.65-74	中村哲士, 保井俊英, 會田宏, 小柳好生, 田中繁宏, 永戸久美, 四元美帆, 野老稔 学生の実行・指導力に現在の実施方法がどの程度の貢献量をもつものかの基礎的資料を得ることを目標とし、以下の結果を得た。1.高い達成レベルを要求する事前教育の必要性。2.事前学習を享受する姿勢。3.体験増量と知識拡幅の方法解明。4.満足・達成感構成6因子「安定と安心」「交流と相互指導」「積極性と達成欲」「触発と参加意欲」「健康状態」「集団生活への適応」の存在。5.自然・野外活動・協同活動に関する効果の存在。
17. スポーツ施設開放におけるトレーニング・測定室の現状 -高精度体成分分析装置の活用・健康チェック表の結果-	共	2005年03月	武庫川女子大学紀要 人文・社会科学編 第52巻 PP.57-63	永田隆子, 保井俊英, 中山悌一, 本田まり トレーニング・測定室の開放による利用者の状況と、INBODYや健康チェック表を活用することによって、スタッフとしての運営・指導を検討した。(1)開放時間の増加と広報活動に努める必要がある。(2)利用者各人にあった極め細やかな指導が必要である。(3)INBODY測定で、身体活動が「好き」で興味・関心のある人たちが有意に優れた結果が得られた。(4)栄養指導(相談)は、実施時間を工夫することにより利用

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
18. 「障害者スポーツ指導員」資格取得者の現状について(2) — ボランティア活動者の特徴—	共	2005年03月	武庫川女子大学紀要 人文・社会科学編 第5 2巻 PP.75-83	者が増加した。 保井俊英, 永田隆子, 田中美紀, 藤原進一郎 障害者スポーツ指導員資格取得者の現状として、ボランティア活動者の特徴を検討することを目的とした。対象は大学卒24名、短大卒9名、中級スポーツ指導員10名、初級スポーツ指導員23名であった。資格取得理由は、ボランティア活動に参加したことが大きな要因で、また役立つ経験をボランティア活動と指摘している。認定校としては、ボランティア活動を推奨できるよう、アフターサービスやネットワークづくりを実現する必要がある。
19. 「障害者スポーツ指導員」資格取得者の現状について	共	2004年03月	武庫川女子大学紀要 人文・社会科学編 51 巻 PP49-55	保井俊英・永田隆子・田中美紀・藤原進一郎 平成12～14年度卒業生のうち、障害者スポーツ指導員(初級・中級)取得者についてアンケート調査を実施し、活動の実態を明らかにした。配布430名、回収152名であった。現在ボランティア活動を行っているが33名、いないが117名であった。また指導員として活動を行っているが22名、いないが127名であった。活動ができない理由としては、時間がない、職業と関係ない、情報が乏しいなどがあげられ、これらの解消が問題であろう。
20. 本学健康・スポーツ科学科における障害者スポーツ指導者資格取得制度と課題について	共	2003年03月	武庫川女子大学紀要 人 文・社会科学編 第50 巻 PP.45-54	永田隆子・保井俊英・田中美紀・藤原進一郎 本学健康・スポーツ科学科は、協会公認指導者制度による認定校として認可され、初級・中級スポーツ指導員の育成を行っている。今回、この取り組みと今後の課題について検討し報告する。(1)基幹科目である障害者スポーツ論、障害者スポーツ指導法演習、障害者スポーツ指導法実習が調整的な役割を果たし、学外実習等で実践能力を高める。(2)情報提供を目的としたサポートシステムの確立が必要。(3)研究活動の場も必要。
21. ジャイロトニックメソッドにおける三次元的解析の事例研究	共	2002年03月	武庫川女子大学紀要 自然科学編 49巻	北島・保井・黛・目連 Gyrotonic Methodにおける一連の基礎研究を'97より北島らが実施。本研究は多関節に及ぶトレーニングのため三次元による動作解析を健康な女子大生を対象に実施。各部位の負荷強度の違いによる可動域の差を分析。安全な負荷強度を検討した。結果、上半身ならびに体幹腹部のトレーニングは、各々の動きに伴う上肢上腕の利き腕、非利き腕の筋力差による歪みがあらわれた。下肢トレーニングでは可動域最大負荷量は約50%であった。担当(pp.7～13)
22. ジャイロトニックメソッドの三次元的解析	共	2001年05月	舞踊学 第24巻 PP.106 -106	北島・保井・黛・目連 ダンサーのための早期リハビリを目的とした本ジャイロトニックメソッドは1992ジュリーは一バスが発明、開発した。本実験はそのトレーニングの運動の特徴を至適運動強度を3次元的な運動解析によって解析した。結果、ARCH/CAURとTWIST/POLUは上腕部の円弧がスムーズに描いていたが左右の歪みがみられた。脚部SCISSORとFULLURCLEは股関節を中心とした前後の伸展屈曲ならびに回転運動であり、いずれも負荷別最大可動域は約50%であった。担当(pp.325～326)
23. 女子バスケットボールプレイヤーの膝関節障害について —小学生から大学生までの実態調査—	共	1993年03月	武庫川女子大学紀要 人文科学編 第40巻 PP. 113-119	野老、保井 先行研究によると、大学女子バスケットプレイヤーの膝関節障害については、選手生命を及ぼすものであり、過去の受傷に影響を受けていると考えられた。本研究は、その受傷・障害について、年齢の推移に従って発生状況を明らかにするために、小学生から大学生を対象としてアンケートにより実態解明を試みた。結果として、①膝関節障害の発生率は、経年によって頻度が高くなる。②傷害別では、小学生で膝関節痛、高校生以上では半月板、靭帯損傷が上位を占めた。③受傷は、高校・大学生については入学年に多発し、大半が練習中で、約20%はゲーム中発生した。④治療日数は、大半が3ヵ月未満であるが、約1割はそれ以上かかっている。⑤受傷後は、「時々痛むが運動を続けている」が極めて多い。
<b>その他</b>				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
1. 運動による糖尿病性腎症の発症抑制	共	2016年09月2 4日	第71回日本体力医学会 大会	保井、竹下、花岡、高田、藤澤、今北、峯松、金内、進藤、鈴木、中谷、坂田【背景】糖尿病性腎症は糖尿病の末期症状の1つである。【目的】OLETF(5週齢)を17ヶ月間回転カゴ付きケージで飼育し(OLETF-WR)、糖尿病性腎症の発症抑制を検討した。【方法】OLETF-WR群、OLETF-SED群、LETO-SED群において、

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
2. 不全心ラットにおいて、自発的運動は持久的運動能力と血圧を改善する	共	2016年07月23日	第24回日本運動生理学会大会	血清生化学物質、尿量・タンパク・Alb・腎障害マーカー等の測定および腎組織解析を行った。【結果】OLETF-WRの血糖値、HbA1c、BUN、クレアチニンは、LETO-SEDと同水準であった。蛋白質・Albの尿中排泄量、腎重量/体重、膨大部面積/糸球体面積、糸球体障害マーカーはOLETF-SED、OLETF-WR、LETO-SEDの順で小さかった。OLETF-WRの近位/遠位尿細管・集合管の障害マーカーはLETO-SEDと同じく低値であった。OLETF-SEDでは、エリスロポエチン産生障害による腎性貧血がみられた。【結論】自発的運動は糖尿病性腎症の発症を抑制することが明らかになった。
3. 自発的運動による糖尿病性腎不全の発症抑制について	共	2016年02月20日	日本体力医学会 第30回近畿地方会	花岡、石見、高田、保井、今北、中谷、坂田【目的】大動脈弓狭窄手術後75週の不全心ラットにおいて、自発的運動が持久的運動能力と血圧を改善するのかを検討した。【方法】Banding群とSham群において、3週間の自発的運動前後でトレッドミル走行持久力、血圧、血圧関係ホルモンの血中濃度を測定した。さらに1か月後に、圧カテーテルによる心新機能解析、左室Ca2+ハンドリング関連蛋白質発現、左室組織解析を行った。【結果】自発的運動により走行持久力の向上、血圧の改善、血管収縮ホルモンの低下が認められた。この不全心ラットの左心室において、収縮・弛緩機能の低下、SERCA2a発現の低下、コラーゲン面積の増加が認められた。
4. Development of rat diabetic nephropathy is suppressed by voluntary exercise in OLETF rats. ラット糖尿病性腎症の発症は、OLETFラットの自発的な運動によって抑制される	共	2015年03月23日	第92回日本生理学会	保井俊英, 竹下, 花岡, 高田, 奥田, 鷲尾, 今北, 峯松, 金内, 辻田, 中谷, 田中, 坂田。【目的】2型糖尿病ラットOLETFを5週齢から17ヶ月間に亘り回転カゴ付き飼育ケージで飼育した(OLETF-WR)。自発的運動が2型糖尿病発症抑制に伴う腎不全発症抑制を検討した。【方法】OLETF-WR、OLETF-SED、LETO-SEDの腎重量・血清生化学物質・尿量・尿蛋白・Albumin・尿中腎障害マーカー等測定、腎組織解析を行った。【結果】OLETF-WRの血糖値、HbA1c、K、T-CHO、BUN、Creatinineは、LETO-SEDと同値であった。尿蛋白、Albumin、糸球体・近位尿細管腎障害マーカーはOLETF-SED、OLETF-WR、LETO-SED順となった。近位・遠位尿細管・集合管腎障害マーカーはOLETF-SEDが高値を示した。【結論】OLETF-SEDは糸球体～近位・遠位尿細管に、OLETF-WRは糸球体のみ軽度障害がみられた。従って長期間の自発的運動は2型糖尿病発症と腎不全発症を抑制し軽減することが明らかになった。
5. 自発的運動を課した2型糖尿病ラットにおける運動パフォーマンスと筋組成、筋酵素活性について	共	2014年09月21日	第69回日本体力医学会大会	竹下、保井、鷲尾、高田、坂田 目的：OLETFにおける自発的運動が、糖尿病性腎症を抑制するかを検討することであった。方法：5週齢雄OLETFは、回転ケージ(OLETF-WR)および標準ケージ(OLETF-SED)で、16か月間飼育された。対照として、LETOを標準ケージで飼育した。メタボリックケージより尿を採取し、HbA1cと、腎障害マーカー(ELISA、Bio-Plex)を測定した。結果：Cr、BUNと1日尿量において、OLETF-SEDは、OLETF-WRとLETO比較して高値を示した。腎臓重量/体重比、尿中アルブミン、尿中タンパクは、OLETF-SED、OLETF-WR、LETOの順に高値を示した。ELISAとBio-Plexにより、OLETF-SEDにおいて糸球体、近位～遠位尿細管に障害がみられたが、OLETF-WRには障害がみられなかった。
6. 自発的運動による糖尿病誘発性腎不全の発症抑制	共	2014年09月21日	第69回日本体力医学会大会	高田、竹下、花岡、奥田、鷲尾、石見、保井、今北、峯松、星野、山田、和氣、中村、岡田、平川、中谷、坂田【背景】糖尿病が進行すると治癒することなく患者のQOLは著しく低下する。【目的】運動により糖尿病発症が抑制された2型糖尿病ラットの運動パフォーマンスと骨格筋特性の関係を明らかにすることである。【方法】5週齢OLETFラットを回転カゴ付き飼育ケージと標準ケージで、LETOラットを標準ケージで飼育した。15ヶ月齢以降、持久力、筋持久力、握力、筋組織解析、酵素活性を測定した。【結果】全項目で標準LR、回転OR、標準ORの順に高値を示した。回転ORの速筋線維横断面面積は、標準ORに比べ大きく標準LRとほぼ同じであった。HK、CS、FABP活性は回転ORが標準ORに比べ有意に高かった。【考察】長期間自発的運動により運動パフォーマンスの低下が軽減された。この要因として、Ht値、速筋線維面積、骨格筋酵素活性が低下しなかったことが考えられる。
				保井俊英, 竹下大輔, 花岡智子, 鷲尾弘枝, 石見恵子, 奥田俊詞, 今北英高, 峯松 亮, 高田義弘, 和氣秀文, 中村友浩, 進藤大典, 鈴木政登, 中谷 昭, 坂田 進【背景】糖尿病が進行すると、心不全や腎不全などの臓器不全を引き起こすことが知られている。【目的】2型糖尿病モデルラットを5週齢から16ヶ月間に亘り回転カゴ付き飼育ケージで飼育し、どのように糖尿病誘発

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
7. 2型糖尿病モデルラットの糖尿病誘発性腎不全の発症は、自発的運動により抑制される	共	2014年08月09日	第24回日本病態生理学会大会	<p>性腎不全の発症が抑制されるか、を検討した。【方法】回転OLETFおよび標準ケージ飼育(標準OLETF, 標準LETO)の3群において、腎重量・血清生化学物質・尿量・尿蛋白質・尿アルブミン・尿中腎傷害マーカー、等の測定を行った。【結果】3群を比較すると、腎重量・尿量・尿蛋白質・尿アルブミン・尿中腎傷害マーカーのいずれにおいても、標準OLETF, 回転OLETFで、標準LETOの順で高かった。【結論】長期間の自発的運動は2型糖尿病の発症とそれに伴う腎不全の発症を抑制し、腎機能障害を軽減することが示唆された。</p> <p>竹下、保井、鷲尾、高田、奥田、坂田 糖尿病が進行すると腎不全などを引き起こす。今回、自発的運動が糖尿病誘発性腎不全の発症を抑制するかを検討した。2型糖尿病モデルラット(OLETF)を5週齢から16ヶ月間に亘り回転カゴ付き飼育ケージで飼育した回転0および標準飼育ケージで飼育したOLETFラット標準0とLETOラット標準Lの3群において、腎重量・尿量・血清生化学物質・血清エリスロポエチン・尿蛋白質・尿アルブミン(生化学的測定法)・尿中腎傷害マーカー(ELISA)、等の測定を行った。腎重量・尿量・尿蛋白質・尿アルブミン・尿中腎傷害マーカーのいずれにおいても、標準L、回転0、糖尿病を発症した標準0の順で値が高かった。また標準0は、エリスロポエチン産生能低下による腎性貧血を呈した。これらの結果から、毎日の自発的運動は2型糖尿病発症と腎不全発症を抑制し、腎機能障害を軽減することが示唆された。</p>
8. 自発的運動は糖尿病誘発性腎不全の発症を抑制する	共	2014年07月19日	第22回運動生理学会大会	<p>保井俊英, 竹下大輔, 花岡智子, 鷲尾弘枝, 石見恵子, 奥田俊詞, 今北英高, 峯松 亮, 高田義弘, 星野聡子, 中村友浩, 進藤大典, 鈴木政登, 中谷 昭, 坂田 進【目的】2型糖尿病モデルラットOLETFを5週齢から16ヶ月間に亘り回転カゴ付き飼育ケージで飼育し(回転OLETF), 糖尿病誘発性腎不全の発症が抑制されるか、を検討した。【方法】回転OLETFおよび標準ケージ飼育OLETF, LETO(標準OLETF, 標準LETO)の3群において、腎重量・血清生化学物質・尿量・尿蛋白質・尿アルブミン・尿中腎傷害マーカー、等の測定を行った。【結果および考察】3群を比較すると、腎重量・尿量・尿蛋白質・尿アルブミン・尿中腎傷害マーカーのいずれにおいても、糖尿病を発症した標準OLETFが最も高く、次に回転OLETFで、標準LETOが最も低かった。この結果から、長期間の毎日の自発的運動は2型糖尿病の発症とそれに伴う腎不全の発症を抑制し、腎機能障害を軽減することが示唆された。</p>
9. 自発的運動により発症が抑制された2型糖尿病モデルラットの運動パフォーマンス	共	2013年08月03日	第23回日本病態生理学会	<p>高田、奥田、竹下、保井、坂田 2型糖尿病ラットOLETFを幼若期から14ヶ月間に亘り回転カゴ付き飼育ケージにて飼育の結果、2型糖尿病発症が抑制された。今回2型糖尿病ラットと対照LETOラットと比較して、この発症抑制ラットの運動パフォーマンスを検討した。5週齢雄OLETFを回転カゴ付き飼育ケージ(回転0)と標準ケージ(標準0)で、また5週齢雄対照LETOを標準ケージ(標準L)で飼育した。14ヶ月間の飼育後、トレッドミル走行による持久的運動能、自発的運動量、金網ぶら下がりテスト(水平、垂直)、握力の測定を行った。3群によると、持久的運動能、自発的運動量ぶら下がりテスト(筋持久力、四肢握力)のいずれにおいても、糖尿病OLETF(標準0)、回転0、標準Lの順で高かった。糖尿病は運動パフォーマンスの低下を伴う。さらに、自発的運動により糖尿病発症が抑制されても、健常レベルの運動パフォーマンスを維持できないことが示唆された。</p>
10. 自発的運動による2型糖尿病の発症抑制	共	2013年07月27日	第21回日本運動生理学会大会	<p>坂田進、花岡智子、石見恵子、竹下大輔、奥田俊詞、峯松亮、保井俊英、高田義弘、中村友浩、中谷昭 2型糖尿病モデルラットOLETFを幼若期から1年以上に亘り回転カゴ付き飼育ケージで飼育し、糖尿病発症の抑制を検討した。5週齢雄OLETFを回転カゴ付き飼育ケージ(回転0)と標準ケージ(標準0)で、対照LETOを標準ケージ(標準L)で飼育した。自発的運動量を毎週、体重・血糖値・血圧・心拍数を1ヶ月毎に測定した。回転OLETFの自発的運動量が大きいほど体重は小さかった。標準0の血糖値は33週齢から増加したが、回転0と標準Lの血糖値は増加しなかった。標準0のHbA1c値は、平均9.4%で、回転0(6.1%)と標準L(5.7%)の値より高かった。OGTTでは糖負荷後2時間で回転0と標準Lの血糖値は減少したが、標準0の血糖値は高い。OLETFにおいて毎日の自発的運動は運動量に関わらず、2型糖尿病の発症を完全に抑制することを示唆する。</p>
11. ラットにおける2型糖尿病と運動パフォーマンス	共	2013年07月27日	第21回日本運動生理学会大会	<p>高田義弘、花岡智子、石見恵子、竹下大輔、奥田俊詞、峯松亮、保井俊英、中村友浩、中谷昭、坂田進</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
12. 知的障害者の日中における活動強度について	単	2011年03月21日	大阪体育学会第49回大会	<p>幼若期から14ヵ月間に亘り回転カゴ付き飼育ケージで飼育した2型糖尿病モデルラットOLETFの運動パフォーマンスについて検討した。5週齢雄OLETFを回転カゴ付き飼育ケージ(回転0)と標準ケージ(標準0)で飼育し、また対照LETOを標準ケージ(標準L)で飼育した。14ヵ月間後に、上記の3群において、自発的運動量、トレッドミル走行による持久的運動能、金網ぶら下がり筋持久力テスト(水平、垂直)および四肢握力テストを行った。3群を比較すると、自発的運動量、持久的運動能、筋持久力、四肢握力のいずれにおいても、標準Lが最も高く、次に回転0で、糖尿病を発症した標準0が最も低かった。糖尿病は運動パフォーマンスの低下を伴い、また糖尿病を発症していない回転0は健常レベルの運動パフォーマンスを維持していないことが示唆された。</p> <p>保井 知的障害者の日中における滑強度を知るために、36歳男性と41歳男性に、ホルタ心電計を装着し、心拍数を測定した。両被験者共、一般的に推奨されている最大酸素摂取量の50%強度の運動については、皆無に近かった。 被験者Aは、被験者Bに比べ、体脂肪率がやや高く、逆に被験者Bは、体脂肪がやや低かった。 いずれにしても、両者とも運動不足で、最低でも心拍数が120拍/分近くまで上がる運動を、積極的に取り入れる必要がある。”</p>
13. ジャイロトニックメソードの3次元的解析	共	2001年05月	第1回韓日合同舞踊学会	<p>北島・保井・黛・目連 ダンサーのための早期リハビリを目的としたジャイロトニックメソードについて、そのトレーニング特徴と至適運動強度を三次元による運動解析により実施。結果、上肢上腕部のARCH/CAUR, TWIST/PULLは上肢上腕の円弧がスムーズに描いていたが左右の差による歪みがみられた。脚部SCISSORとFULLCIRCLEは股関節を中心とした前後の伸展屈曲ならびに回転運動であり、いずれも負荷別の最大可動域は約50%であった。</p>
14. 大学女子バレーボール選手の体力について—M女子大学の場合—	共	1994年10月	日本体育学会 第46回大会	<p>保井、永田、二宮、三村 競技力向上をめざした大学女子バレーボール(M女子大学)選手の体力を、その最高と考えられるユニバーシアードチーム(1987年)と全日本チーム(1986年)と比較することにより、今後の強化を明らかにすることを目的とした。体力の要素より、形態で低身長高体重、筋力では差がなかった。敏捷性、パワーではかなり劣っており、柔軟性では逆に優れていた。弱点補強の体力トレーニングが今後の課題である。</p>
15. プリオメトリック・トレーニングの効果	共	1982年10月	日本体育学会 第33回大会	<p>保井俊英、小松俊彦、山田保、石井喜八 ジャンプ力向上のトレーニングであるプリオメトリックトレーニングとして、ドロップジャンプを台高40cmより行い、10回3セット、週3回、7週間の頻度でトレーニングを行った。結果として、垂直跳びにおいてトレーニング前後で約11%の増加がみられた。これは、脚筋力、脚伸展速度に基づく脚パワーの増加ではなく、筋の弾性エネルギー利用の向上と考えられる。</p>
16. アイソメトリック運動の血圧反応	共	1982年09月	日本体力医学会 第37回大会	<p>児玉公正、関口脩、保井俊英、石井喜八 椅座位姿勢の脚伸展運動を用い、アイソメトリック状態での血圧反応を測定した。被験者は、Shot-Putter、Weight-Lifter、Controlの3群であった。運動強度は、最大筋力の10、20、30、40、50%、持続時間は60秒とした。結果は、3群とも中等度以上の負荷に対する血圧反応において、指数関数的な関係が推測された。</p>
<b>3. 総説</b>				
<b>4. 芸術(建築模型等含む)・スポーツ分野の業績</b>				
1. 第47回全国私立短期大学体育大会バレーボールの部		2012年08月		監督として45年ぶり2回目の優勝に導いた。
2. 平成23年度関西大学バレーボール男女選手権大会		2011年11月		監督として、優勝に導いた。
3. 平成23年度第53回近畿6人制バレーボール総合男子・女子選手権大会		2011年09月03日		近畿連盟所属の実業団(Vリーグ、Vチャレンジ等)、大学、高校、クラブチームの大会で、監督として、ベスト4(3位)に入賞させた。
4. 第33回西日本大学バレーボール女子選手権大会		2008年06月		監督として、ベスト8に導いた。
5. 平成19年度関西大学バレーボール		2007年05月		女子1部において、監督として優勝に導いた。



研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績</b>				
連盟春季リーグ戦				
6. 第45回西日本学生バドミントン選手権大会		2005年09月		監督として、ベスト16に導いた。
7. 第44回西日本学生バドミントン選手権大会		2004年09月		監督として、ベスト16に導いた。
8. 第43回秩父宮妃賜杯全日本バレーボール大学女子選手権大会		1996年12月		監督として、ベスト8に導いた。
9. 平成8年度西日本バレーボール大学女子選手権大会		1996年06月		監督として、準優勝に導いた。
<b>5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等</b>				
1. 健康・スポーツ科学科における情報処理教育7年間の取り組みについて	単	2003年	武庫川女子大学 情報教育研究センター年報 2002	保井俊英 平成7～14年度の7年間、健康・スポーツ科学科における情報処理教育の取り組みについてまとめた。教育課程は、体育情報処理演習、教育情報処理演習の2科目より改変を繰り返し、現行の情報活用の基礎、情報活用の応用、健康・スポーツ統計学演習の3科目に発展し展開されている。また関連設備は、演習室の充実を行うと同時に、学科内LANにより、トレーニング室、ダンス室を含む5施設との連携がとられている。
<b>6. 研究費の取得状況</b>				

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2013年07月～現在	日本病態生理学会
2. 1992年12月～現在	日本運動生理学会
3. 1981年07月～現在	日本バイオメカニクス学会
4. 1981年06月～現在	日本体育学会
5. 1981年06月～現在	日本体力医学会